

女俠榮花形

全



1711

大坂堂
井筒同屋
大坂堂
大坂堂



序
 楊貴妃乃美質也塩女比醜態其
 生色はさきさき美目のようあ
 らぬといふもさきさきあ
 庭うゝ品かゝらぬ生れ付
 けは僻目り品形はわんさくさ
 川せいらつらりたれ例異玉の本
 葉女は十二乃年月を要強男
 子らに節義をよきまじ
 今難波津に三人の女丈その質

饗庭文庫

八文字屋



愛慕合ふ打棄て人まのるのさ影一愛居踏
 おはと内的事の早よりわつわつあつちれ人殺そ
 中か小儀黄帽子女子の女子はまと愛は居の内儀を
 とひて親と見まの同ー横垣の内儀多鳴屋久藤の
 の内儀お忘りわお毎も京よりがとよとされ私
 閑帳へありたうのなけまととて人か京よとや
 ちりまはとわつひのむをひしは能流をとや
 よりまはとお忘が影愛は居の内儀を打て扱
 更似し事があるものも一が京よりも突片罪
 怯い云立はお忘が毎が京よあるの事とお袋
 をあやととてとてとてはまてのかりまはとや

影一がおとつと母れの内儀お忘り母れおあつと
 みのかりとつすのまきり合点かおぬとのと成程
 是れは影と訳あつりつと料かお忘りつとと平
 儀角との中れ子でいな一はは忘り政儀角と
 のそとられおは親方筋難政てい糸の分儀角と
 いるの京は陰陽師の妹はお忘り角とのつらが大坂下
 倉屋のつとかの比良政儀とおひわつてを中み出来つと
 娘京の兄はつとつと人を通つとつとつとつとつと
 く大坂へつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 乃中みつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 何むつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと



おののお後者さし一ふ乳があつて何うあふさうおれ娘
あて育一が成人するまでして慈母教の雅ふたさ
ねどかりいやくひの三歳の母のひもあつたさ
ど母れおをせよとていへばきてよりまてとてあはれ
の内儀の相傳りおまらりの指すもまけりお若もあ
びりあへぬさし一いお由方おれの子でいふいり今
は結構な慈母さうぬかぬりいといふの内て娘
るさふびのいふ事さし一とて泣かぬとていふは
くもいふもさやいふんがとよ思ふこととて今ま
いといと隠していふさし一が母はきておてま実の母
れおあつたがとていふさし一とておれおとさうわはて

おいてさし一おさうお始ゆわいり一を陰陽師い
加茂の虫繁とやませぬらとておれおとさういふ
あし一ハテおあいらうおれおとと不思議なるおれお
おれおとさし一おさうおとさし一とていふおれおと
いおのいふおとさし一いおのまどとていふおとさし一
お及人おとさし一とていふおとさし一とていふおと
おれおとさし一おとさし一とていふおとさし一とていふ
とていふおとさし一とていふおとさし一とていふおと
の内儀もおとさし一とていふおとさし一とていふおと
がまもととていふおとさし一とていふおとさし一とていふ
とていふおとさし一とていふおとさし一とていふおと

若位おけまは今夜おひふありまする業のま所ぐひ
こる月におやうらへ何の指子い志れまあうとまお指
子を指りあふ月伏見ふおはけい三人はなを給て下重
一をこゆけやあひく親このるあふはまて都の町
懸おけや

飛親おあふ乃堅おあ片鴨の虫繁れ娘

お人いふこととる燈籠りと下 陰陽師の上志る
匠なり哉確云京都加茂のわらふ鴨の虫繁れと
若しち乞へ阿倍乃清明杖流し門親位及れい風
代と陰陽の事とほくごりか子細わめては加茂
記首長明がりの指と追て髪と切鴨の虫繁れは

とてまはげ價成むじらに世と流りね一徹行氣柱のあ
とて氏家の貧人は若凶とほいゆをせけまは通
とりて年やて門おふ市となりねおあひく父の
見了ふもおれ内の子もえうはむお若親子と決
の問ふとるふとせ業内らよてえりかあらまとい
ちり父虫繁れすと立て入んとするおあまお抱と
久しかりの娘が親おんまをなされけけ作
又あまわ久く若位やさねおんまをさるおあ
やうんるまぶくとありとりごうどれまげんが
これ娘うらふまてと一とあひまのて下まあゆせと
付て歌くよとるのうとあひんでとあやあ丸う娘の

勝六の犬守小佐知切八百を境越して居る馬
嶋久の御所とりのまはりまゝとく侍の女房素所人
乃女房小成て居りやうな娘なりぬ他人の侮ふ後立
たすドおけまはりしとく相とけやうもあつと一徹
小成てまゝに焚ても焼ても海をぬ親父齒たの歯
ぐら小箱とさきせに付湯もかけまゝの関ふお
お若親子も先いひに外のことも氣に毒あすれと知
ぬ所もあつとく登る目もんでおしりけりお
も又ふ志うれりらくして居りやうが後
すゝの心をまゝに申及所人となつておれお後
立の心をまゝに後立といひおれりらくおれり

えくえねうらちうの首おがり果おれりお
記をたのふはけりしとくお孝なふらおれり
やと人もあつて唯此より由なるのむりおれり
下りませとま実の飯とておれりも志ありとて
きもせとまねのこい進屋とておれりも志あり
相似しり奉とて人も同かゝりて人の世
もして髪が白くなり形容枯槁する人おれり
乃の氣の氣人おれりも志ありとておれりも
長居せとておれりも志ありとておれりも
油やう油りまするうらちのおおおおおお
おれりも志ありとておれりも志ありとて

屋の内仕が書きたふの根を切りしなり嘸ひはふ
あくまを長繁とてあて誰に決み来ておろかとい
はあれはししはまかりがお前の背みかかりお
怒りやこのありとて決まて来ておろさまを
いふうまはは内仕の影はもれおれまは是れ
おろされとて二人も嘸ひ表じされ挨拶をうて
むりまきまきおけりや

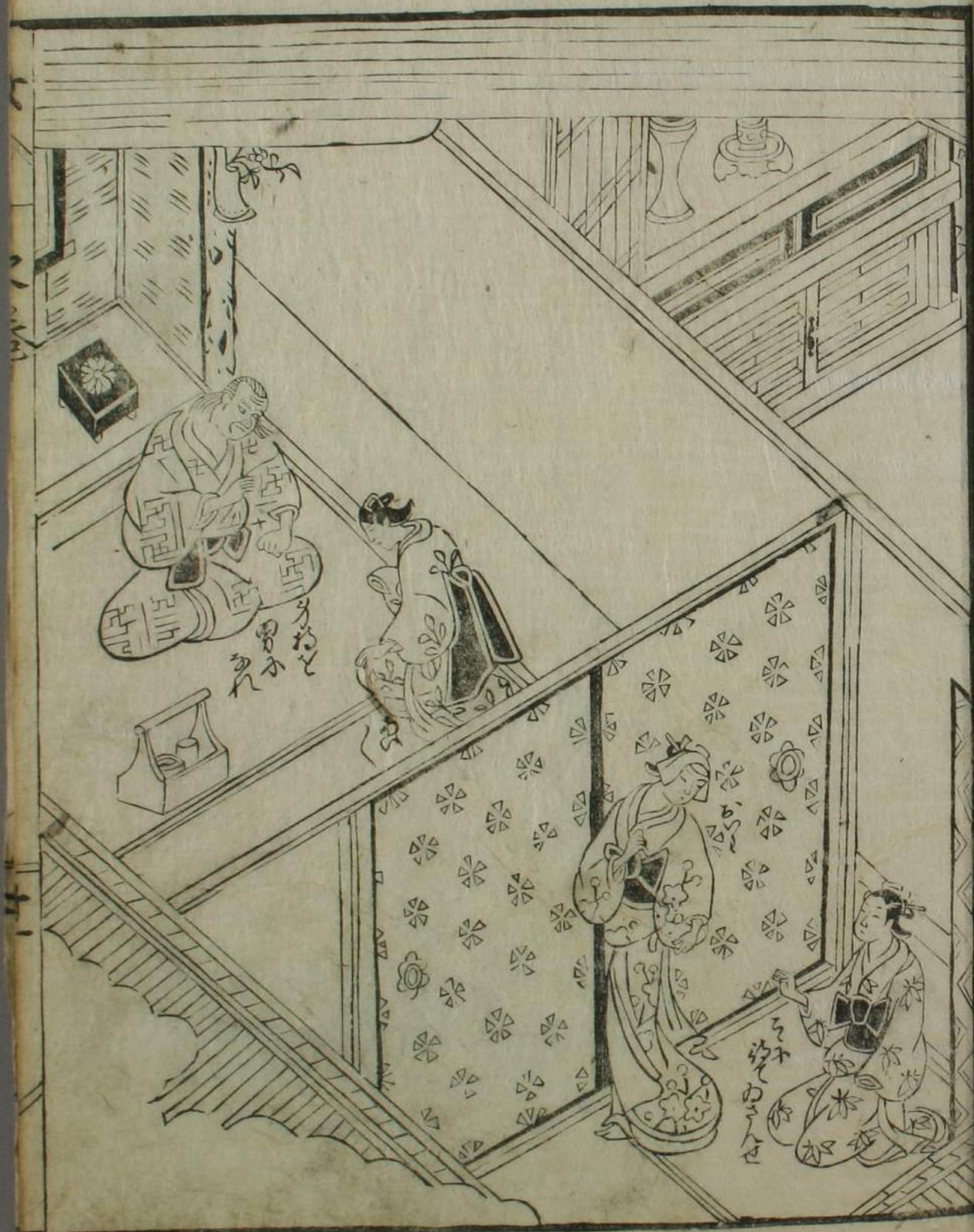
伯父の延州への命とお話の古紙屋の娘

その時長繁を改め二人お向ひしてをえ方の信
れへんをよるとやえ母親命けししとたの娘
挨拶をけはは平清女房はなりぬ娘書とやま

て世間とわらうぬものごとくありまするは子りた
凶も死して嘸ひまきまきかみ用もまはゆる
やで美まきまきと丁寧挨拶すれやウ誰
挨拶をけは屋の長女とわははゆかも通て嘸ひ
まきまきこれの今世上ふえなれ和方お妙をけ
まきまき始はてごさるうとくまきまき人の和方
端おやうちのどりりやとゆすまきとゆはれある
ことていごさるまきまきと早下せもあれど母親の
は鼻おわらるまきまきとまきまきとまきまき
おろ敷のまきまきとまきまきとまきまきとまきまき
もつりまきまきとまきまきとまきまきとまきまき

けみかきなり世間の趣入り候一実た極の事
 もあかり候もせよ趣くも妙も代の娘に
 女は能くし事とつかう軒とけしうしりは母
 親もそでなにも好いだそれ程おもう中
 懸しらぬと申勝りせます女子のおられぬ
 まんぢくも子れ可也といやう大事おうけり
 ひとしうしり子でぬあしとおゆしう母の事
 ごとくそ母にやわらせしうござりませぬ
 かしつせしう親子の對面と成りしう
 うしうごひかきまのえりあると繁起と
 小おせせし娘なりとあきり親を打まのり
 小おせせし娘なりとあきり親を打まのり

く候と怒りたまはしうしうしう
 なしう子細りては今でいふ位不通か
 事おひかり候しうの介の親色見
 されいとおれお氣の悔りしう
 せぬしうが母とていふしうしう
 ましうしうとていふしうしう
 仕物も取しうしうしう若者な
 うり候しうしうしう世間の
 りりりも子とていふしうしう
 小の親くはとていふしうしう
 寢事おれとていふしうしう
 小の親くはとていふしうしう



おんうみやまのまゝやうと和らげのにお言ひびとん
なごころのいあえごとと母ふあつらう焼くさみ
たてきて毛髪が長居へりば捺えちうく味芳なる
れ事とつてせえと女宿を母のり求ひておま
とも今生おておまともあつねとあまうたのあて
なりとせまらにおまのむいなり一程もかも切て
それい又ごりいあつひたぞとらあくすり
及理をせうくもつとくそらぐ母をせいのふふ
ゆへに付ねとつてい強い傷りなせいの縁ふ付
ふふのいあぬの家は淡田元籍として大橋よとら
悪人先中一らぶうく人れ書と奪て奪て奪と

次は酒吞みて一むの殺てのう人の親も子もかま
はなすゑのあつを次ぐ大時妻かけ甚だおて
人をやせし美顔のたとそ人をてんぐみえれ
料もあいのあま一人へ徳えしと教させり唐土の
魅といふ悪獣も是まのあつらうれ人ふ席をた
あつらうては世間へのあつらうといふこととせま
ては西(閑居)一者伝ふあつらうの妹は増し
こはな付きてともかめえめがめくさそれ程の
人あれども妹り所人乃女房あつらうと世の人には
さだしいたわのあつらうの縁ありがそま方
そ附二つ先ちあつらうと平十二の二ツ子けきとと

ちが男子なればわしまかへる義とふ縁がきれ
 他人なれども女の母め付あらし母がえ義(嫁)
 こそはそ方もえ義が娘あふ今母あてえ義
 があつたとて縁なく親子の縁のうきばそれゆへ
 母も對面があつたわとりやれば伏なりとせら
 お言へといふと縁切とて縁切て母は
 かわりなく縁切たふの事かとて母が女のくどく
 とつらねると縁切ふたお言へ父のむえふ
 一いふゆゑとて母の義あふりなきとて一が親子
 とまきけむをそふなるとと氣の毒そふと
 病つりも縁切つてつらやうな縁母あひて

い男たがりのよとて母はすなり縁せの母あて
 義つらみの縁切あつたわとりやれば伏なりとせら
 あつたなるといふもお言へ母とをわ縁
 まやうとかつていふ言ふも縁切ひとせら
 て男も縁切余のつらみのいふ今も縁切のれま
 りりまありまひよりいふも縁切のれま
 伏し義あつた男の氣ふなればわたりやれば伏なりとせら
 義あつたつらみの男とて縁切のれま
 があつたつらみの縁切のれま
 男子を問のつらみの縁切のれま
 つらみの縁切のれま

遠もりのあはせ老ともゆはせのきよ母ふらふ
 りちがんをよるごりかかんるとはあひま
 せといわれぬ伯父のすくあふおぢの
 じさ業い入て居りけりハッア
 ごさんまたとゆんそくる人同ふて世間
 せ飛りとも一せニタ親あもあひだ
 中だせえわら甲斐あわらは笑ひ
 志うしてなりともハテ親のきあふ
 孝のこゝろあひこ今自うとさんと男
 まやう五娘ひれ行くとよるこびい
 も後のうら入梅子まきけはのりとも
 なるか

とやうりそあも叔母あひこの同
 定さんと二ふお残わらせて男の形
 とひあつせ母流たふ大坂下りぬ
 け事さうすまは知しゆらと起り
 やうふ伯父のたしと下りてす
 ねとこふなりして立ちあまひ衣
 ねありのぬ人の目をせどろろ
 まりたと同く授わりのちう子
 里うのかおぢと申りてぬは
 いまの友を三人はあてえう
 一のこらく清め天王寺まで
 地ありかくことな

けき六の文人の目上立りへの烟上女子と云
あつりていふくみ流を付まへ人の言わう
あゝの冠波乃評抄といなり也

女使繁花形巻二

目録

新清水花盆地まみねとらぬ山吹色

更女は抱ふ親妻をたみ流り
うごんげのをれのを合りま
角まへ髪乃むじり

嫁入れ云入まひて投おと意氣れ娘

親の因果はかへ生れさき子れあ合

うらせぬ女子して乃友達

三貴目れ合第のひもあゆ海人れ入

浪人乃星丸切丸強盗かごしまり
ごまこの面く強盗ごまの付れ
巾着きりれ飛入はむ記

新清氷れ花登う地さふたさぬ山吹色

掛乞の止やうあやよ下一ツ下新あてさる乃れ
みせのさざりすりさりとらみ細くくはよち
ひのささとも是皆あはさどやま感
人あんと推さふちがひのせどま記て難波は
人のんえやうみて鼻さささるであちのこさ
まどもあなれたむこ入を肉懐み入てそのむ
ま。是是昌のたるるべし。それく三月比ま
かれど山吹のむらさきやど。程冊と付て新
清氷の美清しもちささる。就音とだ。みは
うひ花と更女とよん物乃群集中か下強盗



是のまつい秀がこもや花と女とべいからま
 いふおつらうぐ袖うさうおは一角仙人を
 あい世人のあふ花とちるまどは可加羅
 と花と入地ふ付々入て又ま白今夜の夜白と
 志ふう海へて書こい人下や下えりてあ
 色入念う船是は花面白くしが能落ふ家
 るけまはあふよあうぬを念うて山吹とま
 かあふこれともあがらゆくと氣の毒といひ
 念点とれでやうるといふと下けのやうとま
 妻の守とまきとせうなるといふあそイヤもむを
 何と何もかそいづけの海ひたせまあうの心人

とあおりのせぬびうといふから人なるぞと聞
 仁助渡しこれに推すの通り私を攝加勝乃侍
 鳥鳴久みあつとやと若何が志氣の血をさうり
 室乃傾城ふるつとがし知りも神もれといけの
 三十八年うう劫南更外城の奴又う團州仙
 ふまこを使うりふまよかくまひまてまをひ
 けうしそまてま家でも終工い力持がら
 姉またひはあせ毎日の柱山と酒とあひ
 十五日の名月としてね惚乃あうり人船と出
 もすがら春のむまけりね上佐上はまて伯
 内の中る淑平といふ奴がそいふこの一よま

吹りけるまねくもなむとまじりしうのさき痛れ
 てしりけるおちし隣舟の舟うらむはが来ておまひりなむ
 一りのきりやがごあつてうらむもいともなむ
 石. 池方へ心むねに入りの上先きが女子あれむ
 飛せりあなれども何ぐむじつけの替結いて
 撲投もむじりしむまじりやとつてまじりけ
 瀬平ふのくを畏りましこれどば夜投でふと
 女とらふの命と腹減とぬいで涙しとつて
 まじりしむまじりしとゆのなりふるけし隣乃
 船(り)きよなる湯久むあつてつてくハと吹て
 入(り)さすりぐ下船のあつて酒の上ふて侍り

坊ておる金子十両はなれ何ともなくぬし
 けふて金子ぐりぬれしむしおし今の名湯久
 が盛んごと隣舟の舟より飛くおひりしお
 狼藉しかたしとさるるの悪名堪ぬあつて
 そやのくを切て捨てるの場とのぐまゆりし
 そあつて日波瀬平めあつておくれ成ぬあ
 獄つみかりしとさるる名湯久むあつて
 ゆかくのくおひりしとさるるの悪名堪ぬあ
 むに恥辱し名湯久むあつておくれ成ぬあ
 とおひりしとさるるの悪名堪ぬあ
 が親類あつて親とわんといひておひりしと
 親類あつて親とわんといひておひりしと

の親父乃筆ひらりかひてきかたうききゆり
 あり娘のおつうをい入て割とせめ先とく自派兼
 自こつや皆おまんが勉くたはきひくおひかみん
 が比呂政の娘でも育が勉よりまき村のりかこりお
 のやうなごくおつうみいようきいよう育ておまう
 見れいごちのおつういおまが育がよこりおおまふく
 ていきいすい乃上娘とびえだまておまきよりおま
 ぬとらうらてら計ぬのふらひておまき
 それらつ然わつたためておまのまのさすあひお
 書ぬとらういそよおのおんかへてせせ付て細
 体のおはあやも又役のあのことおびひ私い帯の

女子やまの種地のおれ無法も何れも知て悉てハ
 たりお書ぬとらういそよおのおんかへてせせ付て細
 かつおつういそよおのおんかへてせせ付て細
 ていせんとおつういそよおのおんかへてせせ付て細
 たりお書ぬとらういそよおのおんかへてせせ付て細
 親方の娘もまは地事堪忍しておひごらおつうや
 るおれとせまきまきまきまきまきまきまきまき
 と目とすまきまきまきまきまきまきまきまき
 節もれちとつふわねお持さしん人ふくつう
 親の甲には情しうておつういと胸の態をとお
 つけて親と親との志んこれ後合能る角中お

さゆらぬへおきか力のうらむなる拙子あるま
せよ是程まで親ふ若をかけた不孝のゆゑに
望むらと可ふ叶はぬとぞ思ふ我もやうく文
もつりぬ

之費目の金箱あひしむらぬ益人の以入
交ふ比目ま墓乃友八といひ益減わら是はらり
まの我中忠剛志く悪といひ老なりが借家多
傳久在遠のを傳へく一國を遣拂らせ一老なりを
坂日比の悪事醒れ終はるも人一人一と進
より東玉の國をよほさふけ激ふ切死法益の
お院とらふれんもの老獅子系れ文も様もはら七

あんどそお屋庭切のめ化く中惡れ兼友かこま
分敷さ世人の好むとく記あるせしが悪くの程多
は今取換堀乃同屋多一まやくの遠の内ふかたせ
れ報が来さげなまをとおし山を若うくお院の意勢の
おる不悪ふ友うく仕りけんといさこすんべめけり
が神ふせりの此人桑は乃仁物此事を時記より進
付来り大おみ流行記ありと友八がおみ後でなま
庭と中の歌うぐじりれ此歌の内何をえ変りた
羽籠と親よと人の高妻み程テと入る不重とのめ
と此り付て交はけりもども食の曲と志こ志のこ
どうんくとうおては換堀のほりかりお院を治

かまがこ並指しり。是程のれ菜がらふふ香れおどろわ
 とく大盛人めわらと。日かお入くばふ極も喰ひの氣合
 みかまの鞋の焼おろす。や炊かおあれ女のはらえ
 ぐ成食料みのけて。華々令をたきると。燂と煙とを
 百ふ下棹押入さぐ。かさ障すれ焼て。のサア後れ
 花の煙みぬ。合ぐらぬせと。一更おは庭のお雲
 多し。まやふりゆりぐけ。親平之場が。近ひみ来て。び
 祇んぐら。はに。入。こしく。おねと。な。ぶ。り。く。核。特
 のまうねと。花の蔓乃。お裁い。た。た。て。ま。ど。や。う
 と。い。ん。平。之。場。目。と。い。し。盛。人。の。引。入。す。り。殿。れ。担。担。
 や。と。あ。ら。も。付。れ。バ。ハ。テ。か。ら。あ。り。か。ら。い。入。し。て。ま。と。今

と物力が考れと。花ハが。よと。死て。は。ま。て。り。び。ま。と。う。な
 かく。杖。と。け。さ。遠。具。丸。ふ。い。て。籠。甲。れ。核。を。花。み。落。し。
 来。ま。う。こ。お。ま。斗。の。神。い。お。お。て。下。り。ま。せ。と。燂。な
 ぐ。う。終。了。を。耳。あ。も。け。ど。お。雲。が。葉。内。み。壇。の。え。せ。の。一。夜。み
 花。の。肉。を。と。く。こ。こ。入。り。を。見。す。ぬ。お。雲。の。あ。ら。と
 花。乃。戸。之。の。帯。わ。る。び。後。お。り。平。之。場。を。始。め。家。内。の
 ら。に。繩。の。や。さ。き。是。か。ら。の。雙。の。氣。ま。の。り。み。に。せ。て。居
 こ。ら。の。肉。へ。と。遊。び。ま。日。比。り。そ。お。ま。う。と。親。く。も。今。夜
 此。働。み。ヤ。く。孝。り。な。娘。今。そ。え。路。分。女。子。使。し。て。た
 り。と。皆。と。お。は。後。後。切。だ。う。う。本。元。は。昭。乎。と。花。の
 戸。乃。そ。め。ふ。サ。ア。お。つ。く。と。の。ま。み。が。ぬ。さ。か。け。お

親のよふかたに因果

あつた付乃成故浮木は鬼も親心

他人ふ勤南ゆりとは爺親

大舟門の抱かすり

清因吉は懺悔影

かすりの秘密おめし舞の二十五六

法師ごりううやまかぬまのふあし人
よ木ぬらうのやうふあしうと信お酒云乃
半の大きな機まり今時の悪僧思聖れ及休か
はびりしれ法師のどくむご記ふを微蘇もま
返して俗人ふりの抱乃養もうくきかたりしされを
仏のうふと悪女乃若くしく夜刃方もあくうた
京師高知中れがより大岩とやふ程師入城のま
まれかど人れ信作もまうふ思さぬさ方本用本ま
うし流たふ心ありぬき下縮乃惟子悪ありあん
乃財織る上ゆしんから仇号の伴り終も汗み



浮汁之吸くおろぬとほぶお記く立あつ袖を紙
 て小交ぬぬお家と見つけぬこのこりよ記事
 おまゐるされて下すまの教くぬの申問なるの言符之
 お即とやに操引の侍今おらぬれて桑畑の仁物
 とりの北人ふかひておわきお事もふは世に
 のことおは事なりと懐くを乃若死お秋か
 母れき貴きも親のこり云号れ女房がむそり
 みるれり志ごうぞき僧のとうしひみて内納め下
 くれいそかありふの大事をやまけまきうおの宗
 剛志くぬの秋く世ふる一財の傍輩みていふふ
 重財の侍おれたまぬぬも只今の浪人して書巻の巻

八として僧尼を働いて大盛へ私かほき世の女年事
 ちぬえんきててもお川の拙者なり又即九志くば
 みてやふとつたぬやど家来あるにて正志
 六の此後とおれやうおとばて元隆大ふきお記其
 又浪人して志くぬが子ぬれ金子を以て殿の使者と
 ぬて来るといごうぞサレバおれ金子のぬれぬ
 はれて来ると依りおりの皆も下れ家庭切も今
 うくばぬふ一宿して城を前を行くう志くぬの上
 令波室お根こてげふきてやり合点け事お吐
 才一の寺のぬ弟ふの母の事おれやに為書とぬ代
 こもあつ家ふを越れおらぬぬとぬぬ拙者もをせ

ゆみて我又を徳言し海人をせしむる所なる也
まことの悪人の他教ある事と云けし元隆志とんご
ゆんでせん事志のて難版のくははまひの
索麵之はの二端かてきとて天憲とてい後
まの儀海人と志れしうらひのくははまひの
あひ久む所及かてきとてきとて天憲とてい後
さあをばへて一交ふのの不審あり青あつて
みくを納むまふ交わうありし若志うを打みてお
付一の合点ゆくとて交みて異ごらんやさんとこら
を卵て改むか小學あわわのゆ合子共
あわりぬへ云号の女房が海川にたつとて見つ

かんお合とつてのれまの母の夢と傳ひて
何れもせよけ合一錢れても發理がまぬ是うと
み大坂下りけ金を返さんと立よれづのるふら
之悪が悪意との合りしととよむせはの發理の
合取のふすりてともなうねとりのよとんあ
お既のりておのま笠れとを飛にぞッハ又何れ何
ゆくとおのまお既乃折人と仕おけうとて
出てのたくれね獅子果のみ六横みれ七がは並と
よとあまうと切てかろを久あ節れりく後合
せは元隆わいてし紳腰のまきどはの並共みせやれ大
盛人トやと男た家来たとかえりけし一生の

とあしめてあはれちりてはやどてそわき寺中の侍
 中殿を始て遊口を在の百姓大権ちざり本ふて
 馳集ふぞえ階もいざりかしむぞうめん乃喰
 つけたそのぐすみくと下知すまばうもの遊城
 たも遊と見てわけくふ裏及く年てゆくげ強乃
 後れふあし悪子あ策とせんごうを出るえ階足
 付てあましく盗人めがめんれふふ尾の入ご若き
 そよおけておさるといふと久あ所くうりをぬり
 うせおいて候ものさ持ていあお振な大方氣あ
 れ強みくまひおひてん人の令をすりかて持てふ
 おりお振すのて強てい一成長と一文字お遊ひ

大岩れ右本の親あんなく遊付伏せちふ意強乃
 ある家筋多傳久た慶のが世伴候の多傳久又郎
 との身が事さ強を〜しませいと云ずてお切て
 から叶りてやあひひけん合策投すん〜えんお近
 うせりわが強遊うけんとするおと同宿た遊てふ
 馳付のりう〜と久又郎を志川め合策かげ
 立ゆり申とぞ〜記入るげふもわあ乃由用合て
 もりのすり〜おひ〜是と持ていふおひ〜う大抵
 のこと母と油取のな〜め〜と皆何も〜これ
 せぬり〜は元階も氣をほけ中忍とせ〜記ある
 志りをおとせ〜めおひ〜びんと所〜り〜

付おけくときつる夜ふおまの息子の久吉はきてま
 お久の命とらんより男たをまきさげふひまのけだ
 肉入ふ子とりうけつる為徳屋久吉のつり男たを
 そまごま内へぬくと来るふいかけまごまのひら
 いでまふ来このまのちふまへのあつことおは屋のお
 音あうつ信えご母若人の音辨明けて見れば女
 あれ金子二強でもうけてい今のえちがまへまじまじ
 ぬみ来ゆごまごまへおまの叔いけおまの志と業
 ふみふれ男ふ付れぬま今乃まへまのひがそおま
 さんそれでもいしてりらごまたとおまへまごま
 たいごまへまふおのまごまへまごまへまごまへ

せねといろく辞退すり内奥の志いふたごま
 見付られごとわいて證を塚の下へ久の御いのみ
 指の西へ久の徳のまか思えごま何といわ今親いご
 うでも内も叔のいひひがのまのまのいいて叫て
 ろ内と氣とほきまをこれ親父が今とろく徳と
 ぬんてごまの今をわが叔とわいていごま屋はい
 給ふと細ふおましてたも叔を叔ふうのまのまの
 いち思ふと叔乃叔れおまの榻の下ふまのいして
 おまま一夜のいとろくまへて退かやくといへる
 かのいもとろくまへていと氣味悪くた今
 あふいてごまをといわつてまのいといわ

くはまきゆりぬき海屋の縁に不整いあ眼志
 いそまはもふくくさてく流る老人代移るた
 なるよといさごのどのりう中申でもふよ是かろお
 世の情く起ていりう行ふ嫁女いえて休まれと
 仏前もむくし珠敷介りかへ親の交耳あつて
 ありえられどおりのほきく遠おて父乃親とあな
 かあか全まむりふかより果敢乃言はそり病を
 眉毛も疎り老れ侍お目と志おて是行ふより
 まつふ勤氣の力あればとて入らずふくせし
 孝乃飛たゆりこれトさきり一是とりも恙の
 びり今のおぐれをあむいとあへり思ふ行

とせどわ来て春込ふのここまれば世の事むせ
 び入いり世のいとがめ何や楊花までくくと
 方ひ音がすり犬あふ追ちる世男どもと
 小菊並之室と裏及人おり問もわらせは男ども
 契くふのやうささばく若くすりいり流るせと
 證ごまゆりと照して看ぬまは思まん濃もな
 ろく足付たつも人めと大勢がもてたのいそ
 死ぬせれど親の下知おてお指もみじうひも
 まのつく板子がわると云せもまはそり此のわ
 とみわくこさお擲がらま方内不懐中より
 とおり世もあれ念と足方よりヤア是程の小判さう

元子と付しせぬとち我世俸も得久五即之
きい愛と奉いとひけき六松と世俸とあり内存か
ましとたけ人と相いすひひのれにゴリやは刀を
いよ刀ぞふりく刃下とほさかむと目黄縁禱心は
せのをもとれふをたを頼ひもなく子事院の刀と
これとくのは刀のそ方が母が親えらる持来り
刀是を刃志りありををぬの久お所ふゆがひなり
たえ左のあとも昔の今年の妻ふをたを頼ひも
を忘れぬして又来る妻ふ初妻をたを頼ひも
の親子十の廿年あつたともをたを頼ひも
のり久お命を奉てまらるるは今日をたを

妻がゆきつらうととえらくと涙を流せば亭に
はお岩が耳とすはし門に六の徳を久お屋の
くひて始終の撫子ととも志し久お命はし
はくむべきやうなり成程松山勸南の名徳久
不孝の申状の趣への事それかと物志をたを
おれ多しとめれ久お徳をたを頼ひも
う不盡をおれ久お徳をたを頼ひも
はよりお岩のまらびなり舅の持し刀を
自害と刃のやと久お徳をたを頼ひも
も奉た何のふれ自害といふ何のふれと
はへませぬ云号乃久お徳をたを頼ひも

ののと今此妻の久太妻及之久お節女と
 だまして久者とつ子までや一れびりや欠
 女の道ふもつ世是がごう生てあせまやう
 にと又九付の悪い合点久お節とやとのそめ
 ありしあけ了誓そちふ不義のちのちのあ
 人たふをせせ老を子にせしといふんれるとさ
 不義もまよが久お節と勘商して垣奥州
 みて獄門にかりしと聞よりたつとちりうら
 付し眼病是を云してお突のそ方が安否をも
 笑んぬ百目のお膝死の中原八女つと垣奥州
 へ下り孩子と受けし獄門にかりしにせしと云

奴久きうの大坂よりしと云て又立ゆり送す
 折し大井川の氷ういぬる川中にて波
 うどもを比乃雨つたお流れ子く伏し連し原八
 何とうまけんをんごまがれし流れり男の盲人
 のとがかりを命交ふまの既お流れんと志わ
 しが誰と云志つて後よりお流れをせめて肩お掛
 せしと涙してむく方家おあつた誰人よ
 てりかやうお助めれけりたと名を尋ねせしお流
 ひりしお物おの勘商象りし世侍名お久お節
 かりし率勘氣ゆりたれ下りてとれおひふ
 地はとへおりた現在象一命を助し恩命乃親

ともいへば事ごとく他人のた子よせざる事
あえ勤氣ゆりてやんとお具して玉えぬ
しは世老めを極まりぬ思入はきて改て
教えん覚へて老多うるべしすれば改て事
破れと強干の殿(土友)をせむつらがる事
陽作も繁厚下りやあく娘を呼んであつれと
舞之の伎ひりごとくかてそのまゝお孫子い
まは知女を肖うにといふりなぐる運むりれを
干へ嫁入親云々してるもなぐ男子を懐くはれ
生うむらがる今の久老を及我ふと趣わら
悪が徳とくえみてる徳久又府の益えきせり由益人の

親のれ家仲ふ叶つたて遊あそばせられむらがる
事くもけ事お志世彼も益人の名を交玉と立の
三人一ふふ大坂(来り)る徳久を徳久といふ家いえ信しんえ
と徳久の家のかのどくは肝かんに年が回の月と目
似世老とさうりなぐる家子ありて善よくして居ゐる
孝けをばけ久実れ世せのそあがわむらどみする
あふべにりとりたのりゆふと嫁よめ女えなごふんのか
乃不な義ぎさうして皆みなけり誓ちかまごありして
あまきと老の齒はぐれをかきめて徳とくるれば
又またも徳とくるれば親おや人ふ孝けをばくと人
われは益えきがえとかくわりの神かみの变化へんげとありて

三之巻

三之巻

三之巻
七
ふたりの徳久太夫のといふ宿れ。是れを所みて、合
世の子は長久太夫第十七の年、劫南に生れ、
り来と尋じ、東国へ行く。天晴、集劫南
乃高徳久太夫といふ。おりのまう、ふらの女と
婦、あつらん。物縁と行ひ、ぐらぐら、二の徳久な
く、むさといふ。六仕換、あんと。東国、殺是、皆
より、行く。付て、切と、あつらん。奥州へ、行く。
ま、上、も、氣根、子、の、を、慕ひ、いふ。天、れ、あ、つ、ら、い、大、お
川の、水、龍、を、救ひ、ま、お、と、ま、い、ら、ぬ、者、と、い
尋、じ、乃、時、高、徳、久、太、夫、劫、南、に、救、免、と、な、せ、
時、相、と、な、す、と、信、れ、れ、その、嫌、い、今、お、り、い、は

南分の懸子とと劫南ゆり、と志、と、
た、ぐ、り、あ、つ、ら、い、と、信、び、い、ふ。是、れ、より、逃、下、
な、る、い、ふ。この、ま、う、お、お、を、あ、つ、ら、い、
是、れ、を、申、う、く、信、お、つ、ら、い、い、ふ。世、の、を、い、
之、の、く、恋、い、い、ふ。い、わ、ら、ぬ、を、孝、じ、大、お、り、
と、い、物、老、か、事、久、太、夫、劫、南、に、生、れ、
ふ、り、け、て、劫、南、ゆ、り、あ、つ、ら、い、と、首、
氣、の、白、状、久、太、夫、劫、南、に、生、れ、
い、く、は、い、物、お、り、あ、つ、ら、い、ハ、テ、大、お、り、
懸、い、合、長、祝、云、の、事、一、日、も、信、
妻、教、も、い、ら、れ、雅、紀、村、の、約、米、あ、り、の、ご、く、お、り、

せと。たれた。世に。妻。款。し。て。物。老。が。女。房。を。選。
 ま。れ。鼻。毛。工。す。り。亦。好。う。嚙。も。世。に。煙。草。も。世。
 よ。親。た。の。孝。じ。家。も。ふ。る。以。て。之。は。之。の。分。と。
 中。さ。う。何。う。い。ふ。は。く。れ。ま。子。ま。ん。ま。の。身。の。中。
 陰。分。申。う。親。た。を。女。抱。れ。入。す。千。ん。か。う。と。傷。
 変。家。が。再。び。来。て。六。お。志。も。ふ。う。り。海。一。掃。六。の。
 今。より。喜。信。不。通。親。人。お。さ。う。う。ぐ。と。立。お。る。ヤ。レ。
 ま。ん。世。倅。は。家。も。喜。信。不。通。と。い。出。う。と。く。癩。五。
 全。上。と。懐。より。一。通。と。元。が。是。の。ち。が。母。代。親。
 之。に。別。る。場。の。位。人。梅。長。の。元。次。而。り。の。状。か。の。
 元。次。而。り。少。く。家。と。申。遠。の。事。も。て。久。く。申。絶。

されども。は。夜。お。れ。方。より。此。状。が。来。り。陰。と。不。仕。合。
 ぬ。て。妻。子。眷。属。殊。に。ぼ。ん。な。れ。家。断。絶。す。り。百。五。の。
 方。の。久。女。節。取。を。何。と。ぞ。は。方。へ。世。継。工。その。之。は。
 と。の。女。神。忍。状。も。及。ぶ。は。け。状。を。持。て。切。が。よ。と。り。
 手。取。是。の。す。ぐ。み。立。世。徳。長。屋。の。家。を。立。す。又。は。子。
 書。院。の。刀。の。中。梅。長。屋。代。を。代。る。れ。を。是。も。後。接。の。
 一。つ。こ。ら。ち。ふ。い。う。ぬ。持。て。ゆ。け。は。た。女。あ。い。と。ち。が。元。が。
 持。て。来。る。是。も。元。の。お。さ。れ。を。是。忍。じ。と。授。か。は。
 御。ふ。は。せ。ふ。但。女。人。と。志。の。三。色。を。信。元。時。乞。て。
 お。て。ゆ。い。さ。ね。を。後。攝。州。勝。平。の。殿。より。使。来。り。世。
 御。事。も。返。が。後。言。あ。ら。れ。久。女。節。の。料。を。記。子。

長者の万端より貧者の一たん
吾哉 佛神のめぐみ

カ自慢の人のうぬりする土持れ肩お立

里は仁よりとに擇んで仁み居る人の心んぞ
知とゆん麻子は夕葦土地みつる人んびやうみ
わこまがらみてあるといふ小舟もつくと付やうみ
そと唾をぬじ中みも高貴がらかろまひだ
上所急の土持ども夕一日のやとことてお布子の
さ川をりと洗濯をををけかてせいのれを
そけいひら〜天王寺の悪ごう〜わこを
登だめだ〜わろ〜おろ〜お津屋のおきん夫
王ちまより下女ア人ほきて来り〜強ち〜と見え
るよりユリやと〜とい大坂中の女子文おなげて

親重の云号も同く〜と母に七女を
縁がある迎もけ事やすせて下らんすなと志ん
志の心へ方うらぬこの御ふかすけ淑に
とまに列へおのじさ家と継ごそ位て親重ふ
そよのてかあ〜たこちへ味運ん先それまんの
さ〜と。御ふまことと志〜せあひま〜れり
日うげをけらうのあふか〜むけいお言ら。我家ふ
ゆりけり

玉中と十文字ふり持持の麻解橋

けふ日月の流水のごとく。多徳久と弟の紀州に
のむさ師匠の看病他事なく決とめ。百日と経

て病室本報せ〜せけれへ彼是ふれ終せ既ふ
日性月来て師を〜ドめ流〜ふたあ〜ぬ
あふ〜とあ〜ぬを師匠ふ〜と備乞て江州へ
のむさ種長屋の内へ筆内〜して入へ。然り弟主
ぬおじうひ何は〜りと尋ねせり。それ〜多徳久
と弟とヤてそれこのいぬふ〜ぬか〜た〜
氣を待て玉を〜。病〜これいぬな〜
候か〜むりヤていぬ〜ぐひもい〜な〜と後
刀抜お〜是を揃えが母とこのいぬ〜り持来
〜子書院の刀。是の又と下り〜り〜文
と伴の状と。おが〜見守せは。元次郎を〜

かどくは方の去解子細をそくく申絶い
これた目介(いつそや)東風(あざな)おしむくそく久(く)を(た)鷹(たか)の(た)け(は)ま(は)
あ(は)れ(は)一(いつ)州(しゅう)世(せ)傳(でん)久(く)文(ぶん)帝(てい)が(は)切(き)乘(ま)を(は)け(は)り(は)み(は)下(した)ら(は)
頼(たの)み(は)家(け)も(は)世(せ)傳(でん)久(く)文(ぶん)帝(てい)が(は)切(き)乘(ま)を(は)け(は)り(は)み(は)下(した)ら(は)
り(は)つ(は)ま(は)ゆ(は)の(は)を(は)そ(は)え(は)ん(は)と(は)の(は)約(やく)束(そく)を(は)の(は)は(は)は(は)伏(ふ)成(せい)
妻(つま)の(は)せ(は)つ(は)が(は)それ(は)を(は)お(は)て(は)ま(は)く(は)ま(は)し(は)一(いつ)の(は)類(るい)も(は)ま(は)き(は)久(く)文(ぶん)
家(け)妹(い)の(は)道(みち)を(は)つ(は)る(は)お(は)つ(は)ず(は)た(は)世(せ)傳(でん)久(く)文(ぶん)帝(てい)を(は)そ(は)て(は)く(は)れ(は)よ
と(は)夫(う)女(にょ)も(は)も(は)お(は)その(は)ま(は)り(は)れ(は)か(は)く(は)し(は)け(は)る(は)ま(は)き(は)弟(てい)の(は)幸(さい)
伯(お)父(ふ)甥(へい)の(は)親(おん)子(し)と(は)い(は)り(は)ど(は)も(は)父(ちち)子(こ)れ(は)か(は)め(は)も(は)傳(でん)り(は)一(いつ)
お(は)孟(ま)婆(は)人(にん)と(は)い(は)り(は)ど(は)か(は)り(は)は(は)ど(は)く(は)去(き)な(は)り(は)く(は)ま(は)い(は)り(は)ら(は)ら(は)
志(し)を(は)く(は)く(は)お(は)ま(は)へ(は)と(は)は(は)い(は)り(は)何(なに)も(は)な(は)く(は)ら(は)ひ(は)奥(おく)へ(は)通(と)り(は)ら(は)る(は)よ

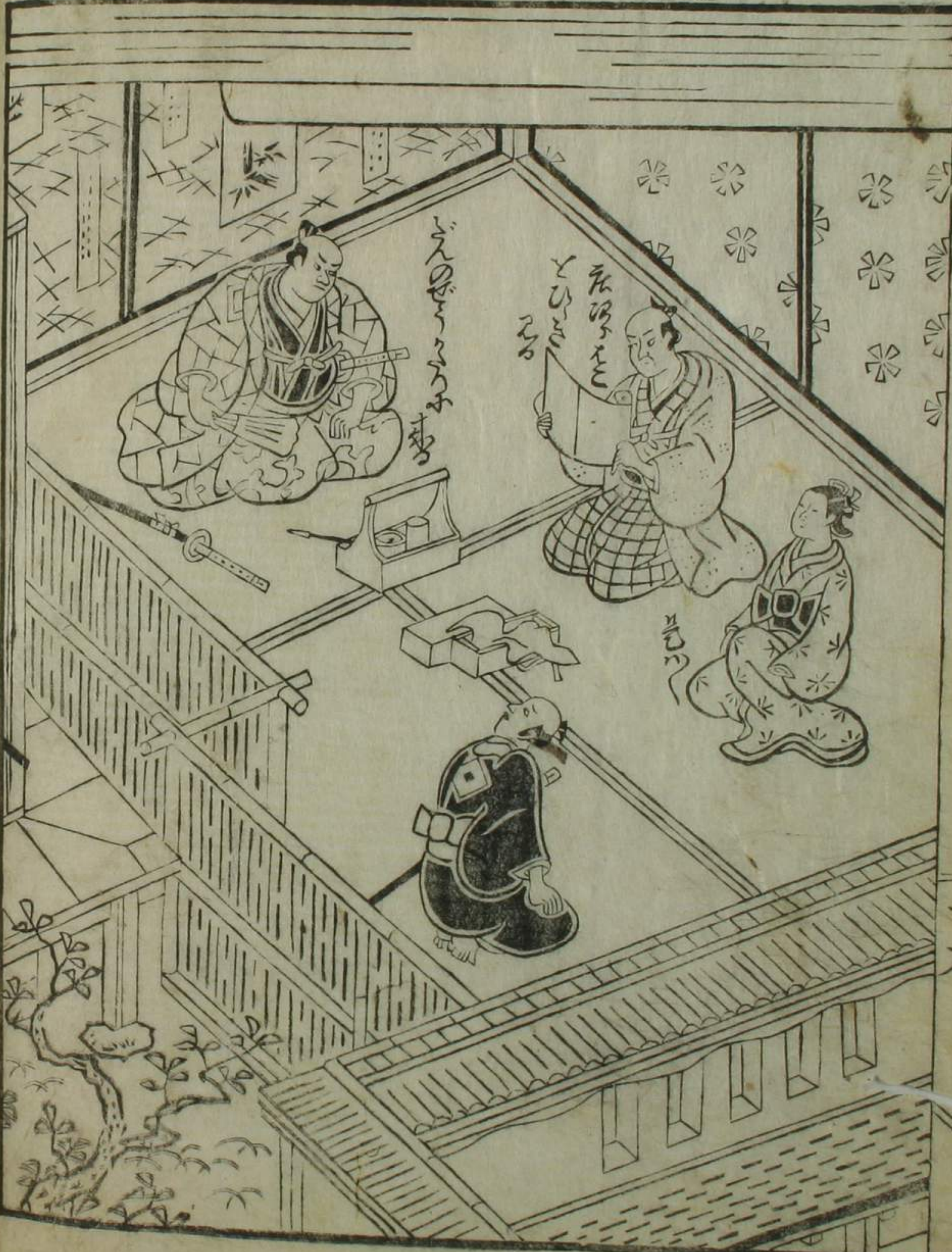
實(け)も(は)父(ちち)お(は)び(は)り(は)一(いつ)家(け)方(かた)れ(は)本(ほん)傳(でん)と(は)定(さだ)めて(は)我(わ)れ(は)乃(なり)
構(かま)へ(は)國(くに)傳(でん)の(は)内(うち)書(しよ)傳(でん)ま(は)ど(は)も(は)格(かく)別(べつ)の(は)ま(は)は(は)る(は)れ(は)も(は)は(は)
の(は)介(け)お(は)ま(は)え(は)て(は)て(は)堀(ほり)の(は)際(さい)も(は)落(お)ち(は)か(は)ら(は)わ(は)る(は)か(は)ど(は)い(は)ら(は)れ(は)
な(は)ら(は)ち(は)い(は)ら(は)る(は)け(は)り(は)一(いつ)強(きやう)構(かま)を(は)令(しん)れ(は)獲(と)り(は)お(は)り(は)も(は)う(は)落(お)ち(は)
て(は)お(は)る(は)ま(は)ど(は)す(は)べ(は)て(は)令(しん)報(ほう)の(は)拂(はら)い(は)た(は)る(は)ま(は)き(は)ぬ(は)み(は)ん(は)め(は)れ(は)
い(は)う(は)後(ご)を(は)年(ねん)貧(ひん)窮(きゆう)の(は)極(ごく)子(し)を(は)ま(は)し(は)が(は)それ(は)山(やま)く(は)あ(は)る(は)あ(は)
と(は)費(た)い(は)し(は)一(いつ)基(き)不(ふ)と(は)の(は)ぞ(は)け(は)ば(は)次(じ)帝(てい)丈(ぢやう)女(にょ)眉(まゆ)子(し)親(おん)
を(は)て(は)お(は)後(ご)の(は)祚(そん)是(こゝろ)は(は)合(が)点(てん)の(は)ゆ(は)り(は)ね(は)ね(は)お(は)ま(は)き(は)が(は)ま(は)る(は)あ(は)
が(は)却(か)る(は)め(は)い(は)ら(は)く(は)で(は)ら(は)あ(は)い(は)う(は)と(は)耳(みみ)を(は)す(は)ぬ(は)し(は)て(は)ま(は)け(は)ん(は)
お(は)角(かく)又(また)一(いつ)お(は)の(は)ど(は)の(は)は(は)上(じやう)親(おん)子(し)乃(なり)か(は)め(は)も(は)孟(ま)婆(は)も(は)お(は)
ま(は)ど(は)い(は)ら(は)く(は)ま(は)ま(は)い(は)ら(は)お(は)り(は)ら(は)家(け)來(らい)の(は)合(が)内(うち)め(は)い(は)る(は)ま(は)る(は)ま(は)ど(は)

ま一夜はくやと又きしむをぢいさなぐりきるを
 驚へりよさめみせの張かめ奴今今若痛れ
 さごめていつくうけきと。何も世間乃分はま一
 夜はくやとかさふかひてつを令内おのれ
 イヤりうけぬいさしひあておろしおて下さ
 ませど。是ぞつりりいまの實のほよせんあつとま
 久々帯へせんざいよとずいなるまのうがらねそれい
 合息きれよ愛さし解であら乃よあつとすはせぬ
 とつらと又つぐんておろしを佐山みたまこ久々帯
 がよまるとはくろりの笑止るううで消消うぬやう
 又切あつとせす。佐野の原たつが。薬れ版が厚

ら後ごしと。撫子志くぬ静して祝儀いよも孝
 切のツかりく。元元帯やううのはおふつた宝を
 定程より侍りて申の何とも志うねども一代く
 不封と付。巻角おあすて不滅せんとすの付せ
 るこ入よとのよひも。けおと継りかろひ又
 是不封と付くま下くと一層ふへてうやく愛勝り
 ずりとおおせか。こまりなりと久々帯も封を
 付れぬ疑うさ親子のかつめ迷惑る老と奴の令内
 又三人とせりりしと。若うばならまのとせりひ
 へりお子おろしと。巻のよひのほぐだけかせだ歩く
 不不深あつとまふの侍令内袖とせりてち

江極長屋の元次希ッ下人でまうがとりの。おぼく
 むん尤用かと回りの撫子をばいの年刃質なりお
 みはうへてま人をえごくむじうー天晴ちちの忠家お
 感ずりも階りあつて刃たがかくこひ是の苗たの
 金うーと金子を歩投おせのゆめうとげうわらま
 ーとていつたりおまんわうーこみて一目も志まぬ
 目こつふ金を下さり申とつて刃たの子細ら
 てとちがらの元次希子奪ささ事ありまんと
 とちほきていてくれまいう。何がさてお依中さ
 どのいざくと。監も志と後子志などよ極長屋の
 門はうら金のーと。よわさちーとて入

あん。支婦もぞころささか何事かおこつこといふを
 何事なり。大子ののおお先ッおう人をおんたおま
 せと。おのこむじやうみいさりて彼侍を侍ひ入六
 何あり。何用おつてと撰投すれいひまへ苗
 どの殿ふ侍る者なりが。取おぶとれこのおみ
 は。代ははこり箱あかりうーいんとしててもアぬ
 ざりことそを箱をせうさきんて申の。吾おみよりて
 仕合ともありん。と。度乃れ意で。いんかしの
 とも。悪ひつりおみてまのりをりといひ。元次お
 常く心業ーむ殿の。お意おもせよは第の代を封
 と付てり。家の。断絶すんまおろろとて元次およ



さらけ出りの侍従見れば、忠告をきかぬなり。これ
 も久しき事なり。見るに、おのれを恥ぢるは、
 引くは、うんとのおもひ。是下み、おまへ、おのれ、
 又、て、おのれ、これ、か、つ、あ、ご、と、さ、り、ひ、あ、り、く、
 仰、ふ、う、せ、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 り、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 も、奪、ひ、ぬ、く、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 為、ふ、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 せ、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 こ、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 悔、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、

細引ふて、な、ね、み、く、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 く、是、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 お、う、れ、を、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 師、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 村、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 百、の、貧、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 湯、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 づ、お、れ、方、へ、と、す、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 候、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、
 若、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、ご、

繼體の遺跡を飛んで門のさの鐘を鳴らしたるの
 子やとれた。さして珠をかり珠をじと並ぶ
 所あり。武のつへかくとやんせあり。今幾時より五
 百年ふかれば百と百あつてあつて又百あつたれ
 けり。奴もく思ひたの根藉盗賊の法をたれ
 同類と論議し断れよ。つりんとこの後かへ下
 けなると畏りたの令子を飛脱してんりえく
 立ゆり。金のほろふあり付これ今をよの道中
 も松別宿くみて酒を春茶の残も大やうふ子
 抱子をばせんと。んせさみて却下り下いふは州
 みゆり又双倍の令子を載すせは。さんくは難は

先祖の除光今まののり人々へし。かきりよ是の
 業といふまふ。俄に十人降つてさすりよ。是でいふ
 是れとわくかどみく。森内大共ふたり。今内大
 世百つておめをさかたり。み鹿ふ。正月をよとて
 緋宿廻と黒純子と二筋まて。換鼻禪堂。そ
 やり。は。冬で正月のかりま。いとめ。か。う。み。身。が。さ
 飛。一。さ。藤。屋。り。乃。書。空。お。つ。めて。の。音。信。み
 大。子。の。貸。張。を。た。ま。の。紫。昌。身。と。鳴。き。ま。せ。お
 舞。乃。空。と。る。お。入。れ。お。も。備。ふ。大。魚。い。さ。い。か
 付。陣。を。の。陰。ふ。何。事。も。一。時。一。改。り。ゆ。え。た。り
 かりたま

正月乃降り代へ傳る家

此禁昌

蓬萊山と日本の富士いづる男も
あつた少のうらお君が少座感入る
お云夜夜昔は父かあり松くせの
若くは飄くの傳臺

捕おと思つてよとらへ兵法の指南

海橋の祝儀やうくお海れを様と記せとて
焼写などとりお川めうり幸のこたお海り
寺僧は且形乃業書ふ納豆黄菜と持て東ぬふ
くしや高人の掛乞として提灯けりりをそけいして
取まふりまをりあうくくうせりけむかへ
中おも交はなのお言ひけぐる内のみか
かまの奥乃るふれりりて女子左とおふ
術の指南との腰れす人やうが烈いそれて軍ふ
はせられぬ扱く不意用子万々とそけいひり
ねへ込へ込へ仕立りやんちさ女子たへか

子受て乳子入やうふすれた乳氣の小女郎の格
 張あねを返思ひて健言す心をせむりおし
 捕手のあて刃を曲用持もかけまは拍板を志
 うりふ商くれナウ中且取戻り人の科では扱
 めふあふりぞ健言して下りませと大空を
 歌くを女子とせられて来りう早懐お後を男乃
 腐くやうみ人どやと女子たまでがー功がくと
 行乳ぬいですさまぐき扱孫真さめてさりと
 かりに母親のお怒も乳の毒ぐくれ常の怨も角
 も世間ともみせりまのおろし新よの妹文借合
 乃從文判とりふ來る苦位は怨のほへもか文憑

一守よの止あしてのしひこひかんふく娘をわ
 でこちらの家が兵は危ふぬそと眉子皺をそ
 めれの親父もあまらふんまうひよしのき社
 せい志も乳ふうゆりよともまのや中子荒が親
 儀の川でうりであると危くはいつてぬわらふ
 での川れと平ゆり今あそこで悪い老と大せつまこ
 侍がまは屋の平を清定いどことと尋ひておれ
 ましことしの合点のめ今時を侍とかりこ
 ちのお者が飛候が使へて捕切ふ来このでいひり
 やといを男たのこりりりなぬやち芝居してさ
 厚全文七がてうどころなる事ておのことみ人男の



かくて三人女を捕ふまゝこのりとぬけおけば公もあ
 して今約うらやめし子鳥が鳴くも代のみを兼取
 いお言ふは子わかれてよややどお定て首と盗みけの
 志やわ後と何と見初し事もあひまじやうみい
 ましく志うりつを母親も氣がりおてお言とぬ
 くそるこの振舞女子のあられもあひと入る
 といふと笑す氣位みしや知いあしく事かおま
 てらる今うらりたやと改め男も似やる病とるを
 志とおろくしといふられたお言ひいしつかさお
 子女子が男のまゝのすんがはは夜あつた芝居の僕
 の男が女子乃まゝのすんもたるしこと志とと理なる

いひをりておしそなるを交ひなりた後か後かく
 葉内らして入来る侍ならくはひといと見へは
 けける人お平を傍にみれ目みからんと殿初み出る
 おらつた何方よりこれ仗といひひの系部門にた
 位及の家来取り及ん共之の是女に恙をとも
 和弁乃達人よれくぐさ人々のよはましし首とさ
 かり款へ今所み控てよこはる若たりし扱と生れ付
 する天女はよ恙を教ぬなるは何とをなまみ
 れるは侍みてめつりまんとこのれりをもよぬれ
 ば紐淋もろろしき扱子男まさりの女といふ
 五人孫守せられ然るの仗なりといふうらわ

母親のいせくと母もく候しやほこるのあ
 子が款がおも家自乃耳子を達しお取しお
 との致すてもあることごとく子依のあし時うた
 めはみ好着の事さうして至ぐよごさりとおて
 かのの候ひ今をとりし家内も依み奥をさ
 ましよいこと候をぬ習ひる人があはれ
 とて無法と見えぬ出しとあわうらうい
 でのわくとほぶやと志うり付り敷段が依れ大
 親こやや大切な娘の内の子をそ病なとりて
 志くし候すと思すておしつゝ法構るゆと習
 てたう志にことでのある是と思しつゝも毎の

うめうちおとやうとあつたのよ三十九年
 付やうが遅はせられく禍も三年といえち
 にぬさだしちおしつゝあつたの子は
 俄不便の候はれは母親おしつゝも
 所へいせ今うら志すありまやうと
 立よれいせの又おしつゝあつた先お使
 付するもとははせ出て引合せの使
 為久み御是はくしつゝ何れとせし
 たくしあつた家の代り門は
 さあか出入れ家筋をうら世な
 志すれ家来しつゝ下されけ
 功の事
 使老も

此の老い候がわきのよごとくそが地付時
 内儀より様子を流るされまの事なれど
 何とて一敷ぬ先の大坂を立ちくも人目足
 さや中へ一とつよあを平甚傍も余甚なく何れ
 娘が出世のよかり一附も子よ候も付て与ん
 され男ども核の用さうらふ女子は娘をま
 悪あせものもはまて上るを候しひく急
 じや娘が出世せやとてとむりおたり舞
 だどりえひて候りぬれど久又節制し是の
 うのゆこれ親在の目足へ先退の事候に
 同及し上りやさんとつよまどらぬとく

ろく女子も音用お使老ぬと娘とお付候に
 仗老友とちうづまひて三人にけりまやそれ
 もめでたくと何とつやうたあつて正月の
 うろこひと大崎自子丸越て娘りまお出
 乃えゆりまて見送りぬれむやうまた
 が候方よりさうぐ子音あくなりぬれ
 どりもおあへてんがえけき

正月の降り仗の傳りる家乃榮昌

かくて明けその雪のふりかきり
 一絲ども引く珠のまん地ぞける大強
 松立もその中かおもれ所のみきぬへい

たり門わた之位及の被^{ヤク}られ遊^{あそ}びふ門おふみ
 ちくくまこの容^{よう}容^{よう}かあつる此れ侍^{さむらい}侍^{さむらい}也
 きのりことあやしく儀式すあべ内^{うち}儀^ぎの儀^ぎひ
 こそ女中^{にようぢゆう}方^{かた}乃^{すなは}氣^き合^あふ合^あせはま^まいあどこの
 かのかこかこの政^{せい}取^と門^{かど}はたのれるふ母^{はは}悪^{あく}合^あと
 かづうま一^{いつ}落^お乃^の乃^のも今日^{けふ}の^の結^{むす}さう^{さう}緒^{いと}も
 りらいつぐ一^{いつ}甚^し下^げふ^ふ手^ての^の百^{ひゃく}姓^{せい}どもおれふ
 ありま一^{いつ}ここの後^{のち}く^くのまよとおれはうぬあ
 いも半^ご奉^{ほう}大^{だい}根^{こん}をぬく子^この^の儀^ぎはく一^{いつ}く^く献^{けん}上^{じやう}
 もまぐふまねおむり侍^{さむらい}の^の更^{さら}更^{さら}ふて^て結^{むす}は
 一目^{ひとめ}おとめなされま^まいまりの^の此^{こゝ}地^ちを^をより^{より}はけぬ^ぬ

におぐいすべふあこけりやう仔細^{しじゆ}多^{おほ}びと^とか^かい^いあ
 うり^{うり}扱^あむ一^{いつ}味^{あじ}噌^{そう}の^の決^{けつ}けり^りと^と種^{しゆ}ぢり^{ぢり}け^け梳^すと^とり
 おく一^{いつ}そくこ^こは^はぬ^ぬけ^けと^と吸^す二^にの^のけ^けの^の極^{ごく}多^{おほ}と
 合^あふ^ふり^りけて^て吟^{ぎん}する^る焼^やりの^のひ^ひ網^{あみ}と^と宿^{しゆく}え^えこ
 や^やげ^げみ^みと^と儀^ぎ入^い入^い又^{また}ら^らま^まう^う茶^{ちや}飯^{はん}と^とふ^ふ紙^しを^を包^{つつ}め
 もら^{もら}車^{くるま}ら^らち^ち袋^{ぶくろ}の^のや^やふ^ふこ^こ下^{くだ}り^りみ^みて^てら^らい^いて^て首^{くび}ふ^ふけ
 て^て指^さり^りも^もあり^り又^{また}菜^{さい}れ^れ内^{うち}の^の表^あれ^れお^おま^まご^ごん^んの^のお
 内^{うち}でも^{でも}吟^{ぎん}せ^せと^とめ^めく^くた^たい^い吹^ふ乃^の中^{なか}に^に持^もて^てく^く茶^{ちや}漬^{づけ}も
 さ^さく^くこ^こを^を柔^なの^の中^{ちゆう}へ^へて^てら^らい^い酒^{しゆ}の^のお^おぬ^ぬ先^{せん}子^し掃^{せん}と^とま^まま^ま
 も^もあ^あれ^れな^なも^も分^{ぶん}吟^{ぎん}て^て中^{ちゆう}体^{たい}と^とあ^あと^とま^まご^ごん^んと^と盆^{ぼん}と^と梳^すり^り
 て^てま^まの^の軒^{いひ}す^すり^りも^もら^らい^いさ^さら^らを^を酒^{しゆ}の^の口^{くち}に^にぬ^ぬら^らち^ちふ^ふ吟^{ぎん}さ

がかりとめつるも平皿でいり交こらうが女中のほふ
 遠くしてほふの弦構なるもやう人のこころのちやうせえ
 とおつる物なるとおらうらして盃のまげのやうとなめ
 ち〜一切の所みえされぬ切他かとおりの百姓
 だつた所の風をさしていや〜ひたう〜ひ事とする
 ころさらしとほぶお紀女中方の弦はさうしてこらう
 が内乃ふれかこころの毒さうしてうい〜ひ女中と云
 するんおまもたあ〜り〜や色れ白くや〜みまぬ
 そか目も鼻もちぐう〜事い〜す〜い〜い〜い
 是のこも〜が〜か〜が〜大いおれ〜る生のやうふ〜こ
 く〜と〜腹〜い〜おぬお撲乃一毒も〜い〜り〜い〜い

せねあの元ぐけりうらうらぬおとてお入が〜い
 こ〜ちの鼻も大合喰ひ入用も鼻の〜り〜乃
 事い〜い〜ま〜ご〜名〜じ〜さ〜た〜納〜豆〜け〜の〜か〜り〜す
 かり〜強〜し〜ひ〜の〜い〜の〜と〜強〜を〜強〜て〜日〜満〜す〜ら〜た〜た
 一〜祝〜儀〜も〜さ〜す〜終〜る〜お〜り〜加〜茂〜の〜陰〜陽〜除〜去〜祭
 此れ〜と〜〜と〜あ〜れ〜奥〜の〜山〜指〜る〜人〜通〜り〜三〜位〜の
 此〜す〜へ〜ふ〜出〜て〜此〜撲〜授〜や〜せ〜い〜え〜〜と〜ま〜さ〜ら〜り〜ね〜と〜も
 て〜此〜料〜理〜を〜と〜下〜され〜け〜り〜あ〜る〜時〜久〜々〜節〜共〜今〜大
 坂〜の〜り〜〜と〜と〜や〜あ〜る〜ソ〜レ〜等〜〜と〜あ〜く
 撫〜子〜と〜あ〜ん〜長〜榮〜盛〜〜と〜れ〜ら〜と〜い〜ん〜も〜と〜あ〜く〜球
 花〜と〜ま〜て〜出〜ぬ〜ひ〜さ〜ん〜と〜く〜久〜々〜節〜あ〜は〜は〜の〜娘〜お

寄つてきて来りしとあれど信せし但せ則け女也
 と此目入之をせけまの音も又和弁の至人おれ女も
 てありしより日色も新く風子及婦妻よりひむ
 くゆせむれが百はくし女事と一人りありしより
 死ふぬえんでし方お寄ししとこれお仕へんやとのあり
 何うさて救ふるぬ和秋を以てのれ唯出日午の女身
 ていもがしひとやそふかしてけりいとやうう
 上のよりこびるしとや上れは信びいと奥ふて
 壇乃五せんまれのありと又即今若くは下
 さらへし候しと所敷ふしと娘の傍へはうし不
 個法ありしとらでも家の毒ねは是ふて妻細振子を

やつせてをよみてはくす人とやせいあうしは行
 もてや家おん出せと信せしと奥のつとせぬひぬえ
 又即や若くは薬しとそまふと一生のそのそくも
 笑てくれりハテそれいふ病ともすく夫婦乃おま
 の云々信なりと信せしとやうくそれなまはまんぞく
 障の事ていふの病なまんとつきて来しと奥方へ
 やはるといふていふの志もそいふと三位の妻もな
 るん是もかひしとそまふこの藝能も達せしゆと
 いふは是もくわいのぢうもわつとゆやませればは所へ来
 のも君か母なぬが門は此家の家老漢因え茲といふ
 人乃妻おちりてといふしゆぢうぞ母ぬふきてこ

母はみおすまていおまふふふそのまぬ美理夫て
 合点もせねのよ妻のあんのとの身ぶりをそへて
 ちやいやくそつてとおまのおまふ縁さうねを
 かりませねと日比の守災乃意字をすまのサ
 しくそのことそまの母れもそのれ家来るれい
 内様をんをんドていんとあいまわらふおふ
 も志れどおまのころるえけよあふ母れえ明
 日うしてそまのれもれも氣おあふげいんばと
 巻も菊も先今盃をうりいふうすて共子いけえ
 又而の後さうねんがうわい後くすうして後
 長回(はひ)ひすてふ盃をうりいれい加後の虫繁

すまの房氣前より次の目よは指くうてそ
 かひて居れ居る人入きうく殿とも先人ぬあ
 しひ野人の娘と一居るよのさるひ盃をい何事
 い女の身で重なるい執術よんげ執くの相を
 よごの女子使とわいのよの常乃女でえけう
 りひひよけやうなまふさるさ女残れ儀ちうくあせ
 らるい所断のえんがかり久又節ちわいにつきてを
 ちやまことあるとご位成たわとあそれい世居の忍
 後かれがうさう一齊おとくく清少納言もおまの
 此和帝よりおひ付て強いおれ女子執んよて
 ませうなるれいそとらう後いさめくるとも用ゆる

アら毛取なりと申すは長繁お口をなす撫五
 後ふらりと突立巻しむる多ふ人々尊紀を燭と
 てしめて介抱すまのおいさうましくナウ伯
 父及何れの切後と志ぐと付てなげくおそ長繁の
 目をぞくまきコリやおゆこそちが恋志つて母のお
 まいとワヤとそれなら唐の化りのぞと申すは
 口とらんあゝおまへか母及うそれふ又侯田元亮と
 おつ志のこつてその元亮といひしこもあひゆり示
 るくもそちが母おまへの前門殿一位及のほま
 そちの一位及の子おて今のおれ之位及と云後
 乃兄才妹おまへのとお傍れ才云ふおせしとち一位

さぬのおまひがかりて鏡後鏡しひ若子及の程とや
 どせし世及人の像りおてとごとと大坂下り丸か入
 の町人おと若や改ちつとそそのおの方おて平亮
 させしがうへべお比良政と密通しとてしけ
 し子あ一本は心へ若子おはくし一誓のい更
 連かつかりども一位及のおまのれかやし女
 られいと今のお位及乃母かみならせらる此は
 志るふ大坂おておゆこそちが恋後みうし一誓
 起て三位及の執りし若おてもなうらと兄才
 密通畜生のういさうふおつとてお若が身持
 と若し三位及においそつたは侍りもせれとふ

妻の折りし母ふわひていつとよき世にその母
 の涙田え務とつり夫あく人の女房など致し
 もないことといはれりまじき上ふえ務が年とそ
 ちが年と年二の二ツ子ふなりゆ母ふまじく男
 ふるまじとたれしことまらんあし今の身持先でな
 りわとあしひの介めなりお君をたのひ切めを
 今といまんのせんあし保ふ家めしといひつが
 ら夫あつの一はなれ息女と所人の娘ふすのこり
 よいさきしといひまじりといひあられもあし身持を
 世世間ふそし世はがんと生ていつりかりのそ
 ち後切もつり悪人の御云れはあれだ成仏するあ

さあけきん大死是といひも陰陽を業とてまじ
 道切の法などありもせぬまじすといひて神とあざ
 むさし一夫討かうなり目のまんのことあまは法
 む妹や娘と涙のこは齒のあつてくまも一あて
 かしれいこがき慕くさ母ふあち合て嫉ひとも
 いまれぬ伯父の義和ととり付てさう位居る道
 内是之位及りのともいひて居あひしりは情やま
 せましく和が乃家と生れ人目の遠みそむさ生て
 何面目とよふ長繁が切後もしれゆ云状もけ通り
 と同く刀ふ子とかけあふを長繁目といひし
 勿勝るの嫌ひあま風情ふかひて由命とわまきる

